



塾生のみなさん、こんにちは。

前回講座では北大の谷本先生を講師にお招きし、蝦夷三官寺が設置された背景について、日本を取り巻く国際環境の変化、特にロシアの東への進出とそれに対する江戸幕府の対応を軸にお話しいただきました。始まる前まではちょっと難しい内容かな？と思っていたのですが、なんのなんの、鎖国と呼ばれる江戸時代だけど実は4つもの窓口で貿易していたこと、無限に広がっていると考えていた蝦夷地のすぐ先にロシアが現れたときの幕府の驚きぶり、蝦夷三官寺の宗派が決められた理由、そして設置箇所の一つに様似が選ばれた3つの理由と近藤重蔵との関係など、とても興味深いお話に50名を超える参加者は真剣に聞き入っていました。また、最後の質問コーナーで出された質の高い質問内容に、「さすがに様似の人たちは歴史を知ってる」と谷本先生も驚かされていましたよ。



## 第11回講座（3月）のご案内



さて、次回3月の講座が今年度最後の講座となります。次回のテーマはジオ塾ではこれが初めてとなる水産業です。冬島地区の若手現役漁師を講師にお招きし、「様似町冬島地区ではどんな海藻類や魚介類を、いつ・どこで・どうやって採って（捕って）いるのか、また、採ったあとはどんなことをしているのか」といった、知っているようで知らない漁業の現場の生のお話を聞かせていただきます。本講座は塾生以外にも広く開放しますので、友人知人をお誘いの上、是非ご参加ください。

### 第11回講座 座学

#### 「アポイの根っこから」

～様似冬島の磯根漁業のはなし～

1. 日程：平成24年3月28日（水） 19:00～
2. 会場：中央公民館小ホール
3. 講師：伊藤 栄 氏：えりも漁協冬島支所・青年漁業士 ほか
4. 申し込み

事前の申し込みは不要です。直接、会場にお越しください。

5. 持ってくるもの

アポイ岳ジオパークガイドブック 筆記用具



## お知らせ



**ジオ塾が生まれ変わります！**

2年間お付き合いいただいた「ふるさとジオ塾」ですが、来年度から大幅に生まれ変わる予定です。詳しいことは改めてご案内しますので、お楽しみにお待ちください。

## ラッコが等澍院を建てた？

## ジオコラム ⑬

前回の講座で習ったように、様似の等澍院設置にはロシアの千島列島への進出が大きく影響しています。では、なぜロシアは遠い極東の地までその手を伸ばしたのでしょうか？実は、ラッコがいたからというのが大きな理由なのです。

当時、毛皮はヨーロッパ全土で人気があり、毛皮を主要な輸出品としていたロシアは、クロテンやリスなどの毛皮を求めて東へ東へと領土を広げ、1700年代の中ごろには、ついにアラスカにまで到達します。そこで初めて出会ったのが「ラッコ」。最高級の毛皮を持つその海の動物をロシアは猛烈な勢いで捕り始め、たちまちその周辺のラッコを捕り尽くします。そして、次にロシアが矛先を向けたのはラッコの豊富な千島列島でした。

千島列島ではもともとアイヌの人たちによってラッコ猟が行われており、1600年代初め頃にはアイヌの人たちが松前藩に毛皮を贈り、藩主はこれを江戸の将軍に献上したという記録があります。毛皮の一部は長崎を経由して中国へも輸出されていました。ところが、1700年代終盤になるとロシアが千島列島に入り込んでラッコ猟をするようになり、様々な衝突・問題が生じます。こうしたラッコを求めたロシアの千島列島進出への対策の一環として、東蝦夷地の幕府直轄化、そして蝦夷三官寺設立が実施されたのです。

参考資料：「知床の海獣狩猟」斜里町立博物館

# 第10回講座のおさらい

## 「幕府の『異国境』認識と蝦夷三官寺」

講師 北海道大学大学院文学研究科  
谷本晃久 准教授



### 1. 17世紀なかばの日本

17世紀の半ば、徳川3代将軍家光の時代には既に幕府権力は確立し、安泰していた。その頃、幕府は、幕府が認めた港で認めた相手とだけ貿易をするという体制、すなわち幕府による一元的貿易管理体制を貫徹させる。いわゆる後に“鎖国”と呼ばれる状態。

同じ頃、幕府は、中世以降力の強かった宗教を管理しようとする。幕府が許認可権を持つ寺院法度という法律をつくり、幕府が許可した本山以外に寺の仕組みを作ることを禁じたり、幕府が認めた教団だけが宗教活動できるようにした。また、幕府に都合の悪い教えや将軍の権威を認めない教え（切支丹や日蓮宗の不受不施派）を邪宗門として定義し、排除しようとした。さらに、京都を中心とする宗教勢力及び権威を弱体化させるため、特に関東東北の寺院に対し権限を持つ寺院【関東触頭（ふれがしら）】や役職【僧録】を江戸に置いた。例えば、天台宗に関しては、京都の総本山である比叡山に対抗して上野に東叡山寛永寺を建て、禅宗に関しては、京都南禅寺の僧・崇伝を江戸の金地院に連れてきて僧録に任命、さらに、浄土宗に関しては増上寺を僧録とした。なお、後述するが、その3つの寺院は全て後の蝦夷三官寺の本山（寛永寺は等澗院の、金地院は厚岸国泰寺の、増上寺は有珠善光寺の本山）になる。



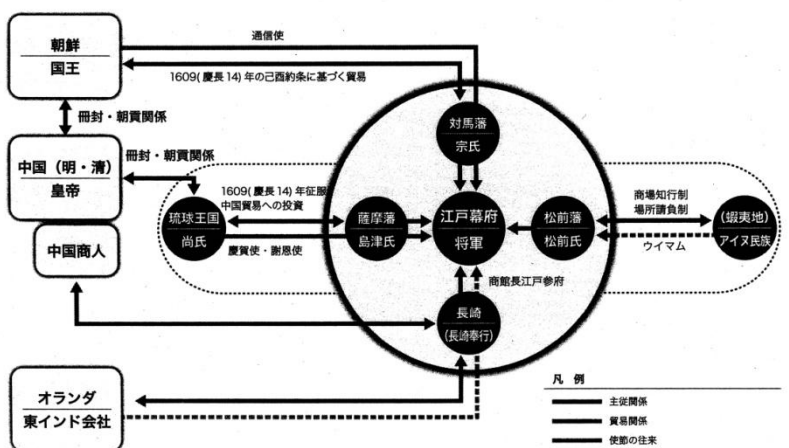
歌川広重「京都名所 上野 東叡山 全図」（東叡山寛永寺公式HPより）

\*この図は講演時には使用されていません。

### 2. 17世紀の国際関係と“4つの口”

先に、“鎖国”という言葉を使ったが、それは九州でのヨーロッパとの関係における“鎖国”でしかなく、全く外に対して閉ざしていたわけではない。というのは、長崎出島（対オランダ）以外にも、対馬（対朝鮮）、鹿児島（対琉球）そして松前（対蝦夷地）という3つの窓口を持っていたから。当時、中国は服属して貢物を持ってくる相手としか貿易しなかったが、日本はそれを受け入れなかった。しかし、世界一巨大な市場で世界一文化が進んでいた中国とつながりがほしかった。そこで、鹿児島

#### 江戸幕府を中心とした17世紀後半～19世紀前半の貿易と外交 Trade and Diplomacy from the Latter Half of the 17th Century to the Early Half of the 19th Century



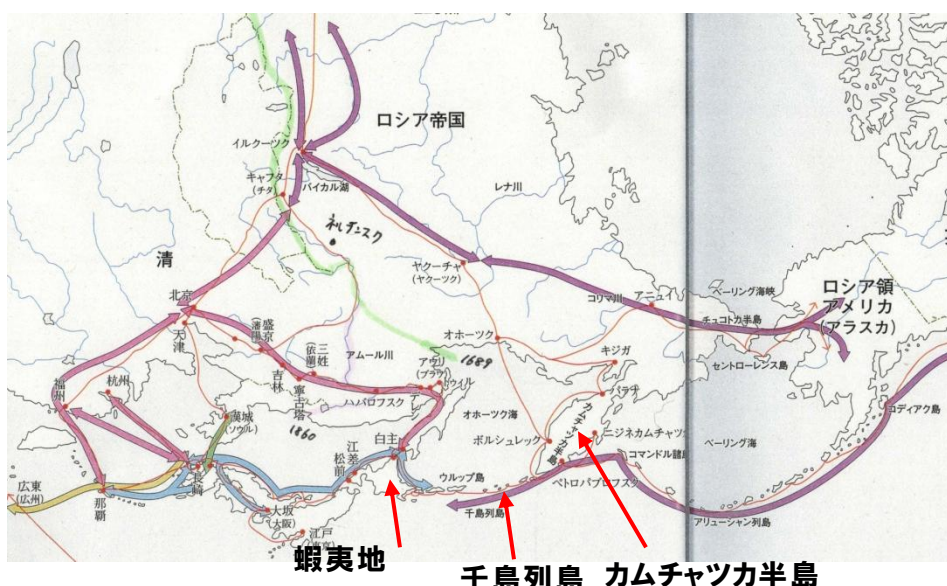
国立歴史民俗博物館編『第3展示室ができるまで』  
（同館、2008年）85頁（鶴田啓考案）



も中国に服属する王国という形を存続させ、琉球を通して偽装貿易を行った。同じように、対馬藩は朝鮮を通じて中国物品を手に入れていた。また、出島での対オランダ貿易でも扱うのはほとんど中国のものだった。さらに、実は蝦夷地を経由した中国との貿易も存在した。清朝の時代、その支配の手はサハリンの一部まで伸びていたため、サハリンを通じた細々とした中国市場とのルートがあり、幕府もその存在を認めていた。しかし、基本的には松前の先にはまだ野蛮な（とみなしていた）蝦夷地がどこまでも広がっているという認識だった。このように、17世紀当時、異国との窓口は基本的に全て九州であり、そこを管理していれば異国との関係は管理できる、北に関してはその先に異国はないので松前の殿様に任せておけば大丈夫だろうと考えていた。しかし、18世紀に入ると状況は激変する。

### 3. ロシアの東漸

17世紀後半、南には強大な清が存在したため、ロシアは東へ勢力を伸ばしていった。1706年頃までにロシアはカムチャツカ全域を征服、さらにその先のアイヌ民族が住む千島列島にも徐々に進出し、ついにウルップ島に到達する。幕府はどこまでも野蛮な地が続いていると思っていたのに、気がつくとも異国・ロシア帝国がすぐそこまできていたのである。その当時の北千島のアイヌの人たちの実態：名前がハリストス正教の洗礼名であったり、十字架などを所持していたことが「休明光記」という資料に書いてある。ここにきて幕府はようやく、野蛮な土地がどこまでも続いていると思っていたのに、実はすぐそこまでロシアが来ていたという、17世紀の国際環境では想定できない事態の出現を認識することになる。



大塚和義「19世紀初頭の北太平洋地域の交易ルート」

(同編『北太平洋の先住民交易と工芸』思文閣出版、2003年)に加筆

### 4. 日本の対応

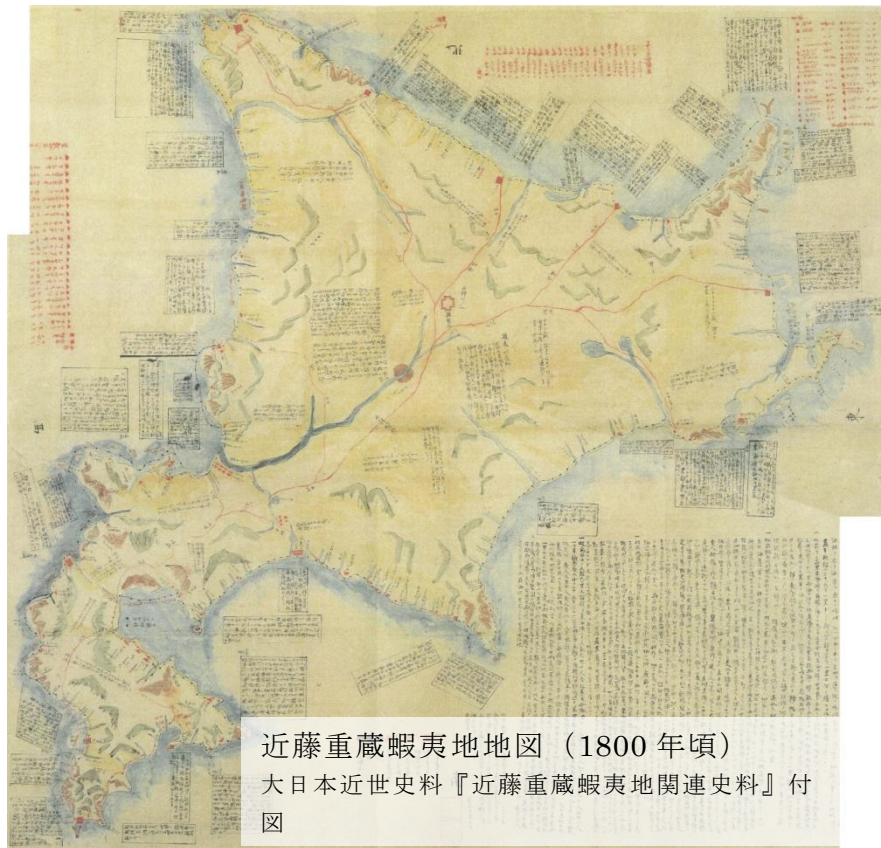
その頃、幕府の権力を握っていた田沼意次は面白い人で、「ロシアがそんなに近くに来ているなら、交易したらいいじゃないか」と考える。そして、蝦夷地直轄や開発を視野に、最上徳内も加わった大調査団を蝦夷地に派遣し、南千島、樺太などを調査。しかし、田沼の失脚でその交易構想はとん挫。次に幕閣を率いた松平定信は慎重な人で、「ロシアがそんなに近くに来ているなら、危ないから国境を管理しよう」と考える。危機感を持った定信から指示された松前藩は、1790年に「蝦夷地改正」を行い、東蝦夷地の厚岸と西蝦夷地の宗谷の2箇所に兵隊が駐在する勤番所を設置する。これは、そこを国境の最前線、すなわち「異国境」とであると認識したことを意味するもので、大きな画期であった。それでも不安な幕府は、探検隊を何度も送ることになるが、代表的なのが近藤重蔵。幕府はその調査結果を踏まえ、千島列島は国後・択捉まで、樺太は南の部分までが日本、そこから先は異国ロシア、つまり、そこを異国境であると結論づける。

近藤重蔵は10年間の蝦夷地調査を踏まえ、蝦夷地の管理方針としての要害案を策定し、幕府に提出する。まず、奉行所または大名の城を置く中心地として今の旭川付近が最適と考え、加えて全道に11箇所の出張所・陣屋番所を各地に置くべきとした。番所の適地として、太平洋側は絵鞆(室蘭)・様似・厚岸・野付。西は寿都・高島(小樽)・増毛・宗谷・枝幸・紋別・網走を挙げている。重蔵は様似を選んだ理由を3つ挙げている。①様似の港から江戸・奥州(東北)・松前・羽州(秋田)へ太平洋航路で直接行けること。②山が近く森林資源が豊富で、当時江戸で評判の高かった蝦夷松も伐ってすぐに積出しできること。③元々の交易所であり、港湾施設がすでにある。港湾の中はそんなに条件が良くはないが、海が荒れても1年間を通じてここでは船が退避できること。重蔵は早くから蝦夷地の要衝の地として様似に着目していたのである。



1799年、幕府は東蝦夷地を松前藩から取り上げ、直轄支配する。なぜ先に東蝦夷地か？それは千島列島までロシアが来ていたから。当時の移動ルートは当然海岸線であり、松前から国境である択捉島へ至る太平洋岸ルートが国防上クローズアップされ、その通り道にあったのが様似。今日はジオ塾だが、その土地が持っている政治的な意味を指す「地政学：ジオポリティカル」という言葉がある。なぜ米軍基地が沖縄にあるのかという問題もこれに含まれる。重蔵が様似を要害の地に挙げ、実際に奉行所の出張所が置かれ、その後、等澗院が置かれた。これは様似が持っていた地政学的意味を表す。

なお、幕府直轄の直後1802年に蝦夷三官寺建立が決定する。その場所として選ばれたのが、重蔵が陣屋番所の設置を提案した様似、厚岸、そして絵鞆に近い有珠である。



近藤重蔵蝦夷地地図 (1800年頃)  
大日本近世史料『近藤重蔵蝦夷地関連史料』付図

## 5. 蝦夷三官寺設置過程の再検討

さて、松前の先の蝦夷地、国後・択捉、南樺太までを国内、つまり幕府が管理する場所にしようとしたことで、幕府は17世紀に設定した宗教的秩序が、この地でも貫徹されなければならないと考える。すなわち、邪宗門の禁止と幕府の管理する仏教の普及である。原理主義者であった重蔵は、家康を祀る東照宮を蝦夷地に普及させることを提案した。実現しなかったが、考え方自体は後に設置される蝦夷三官寺にも影響を与えた。

どういう寺院を設置するかについては、実は函館奉行と寺社奉行とで意見が分かれていた。函館奉行は、墓守のお坊さんと墓所があってお葬式だけやれば良いと考えた。この案は、新寺建立を禁じていた幕府の決まりをクリアできる。それに対し寺社奉行は、異国境である蝦夷地ではキリスト教の進出に対抗する必要があるし、蝦夷地も国内と位置付けた以上、邪宗門をきちんと制御するため、正式な幕府公認の新寺院を設置する必要があると考えた。その結果、寺社奉行案が採用され、その3つの新寺の本山として選ばれたのが、最初に述べた、幕府が宗教を統制するために権限を与えた寺院である。

幕府は蝦夷三官寺に何を期待したのか。それは、邪宗門の防御、アイヌの人たちの教育、国家安全・異国船退散の祈祷。幕府が統制するためにつくった本山に命じてお坊さんを派遣するから、安心してこういったことを任せることができたということになる。蝦夷三官寺がこうした機能を期待され、実際にそれを果たしていく様子は「蝦夷地はもはや国土であるとの宣言に似た行為」(高杢利彦)と見ることもできる。蝦夷地ではあるが、17世紀にあったような認識ではなく、そこを異国境の内なる域・国土として宗教統制の面からも位置づけ直されたという見方ができるのである。



アポイ岳ジオパーク

アポイ岳ジオパーク ふるさとジオ塾通信 Vol.16  
発行：2012年3月  
発行元：〒058-8501 様似郡様似町大通1丁目21  
様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会事務局  
(様似町役場商工観光課)  
電話：0146-36-2120 FAX：0146-36-2662  
E-mail：apoi.geopark@festa.ocn.ne.jp  
ホームページ：http://www.apoi-geopark.jp/